

「暮らしを寿ぐ切り紙窓花」展

期間：2016年12月2日(金)～2017年1月22日(日)

人びとの暮らしを歩き、よく見てよく聞く。そのことからフィールドワークが始まります。みなさんも、映像やマオさん家の日用品から、サンワー村の暮らしを想像してみてください。



ビエンビエン

鍋や水瓶のふた、包んだ餃子を並べたりと、台所で大活躍する板。コーリヤン（高粱）の茎を並べて縫い合わせて作る。

牛の眼帯

大きな石臼を牛に引かせて脱穀や粉挽をするときに、牛が目を回さないよう、麦わらで作った眼帯をつける。目玉のアップリケがユーモラス。

ホウキ

ホウキ草を束ねて、^{カン}炕（オンドル式寝床）を掃く。細かい黄土の砂埃を掃くための必需品。穂先が短くなるまで使う。

ハーロウジー

「ハーロウ」と呼ばれるうどんの絞り出し器。練った小麦粉をなかに入れて、ぐらぐら煮立った大鍋の上から絞り出す。大勢が集まる春節や冠婚葬祭の定番料理。

ひしゃく

水は遠くの谷から運び、水甕に貯めるので、アルミ製のひしゃくは必需品。

ハンガー

前庭で洗濯物を干すのに使うマオさん自作のハンガー。冬はバリバリに凍るのですぐ乾く。

靴の中敷

女性たちは大切な人への贈り物に中敷を手作りする。切り紙は刺繍の型紙としても使われる。

麺を作るおろしがね

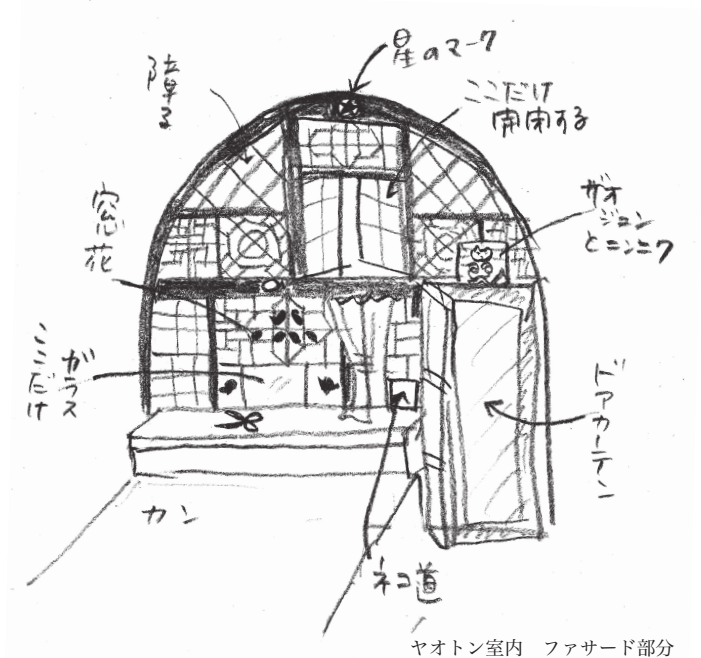
練った小麦粉の生地を削り、パスタ状の麺を作る道具。さまざまに違う形の麺ができて、食べ飽きない。

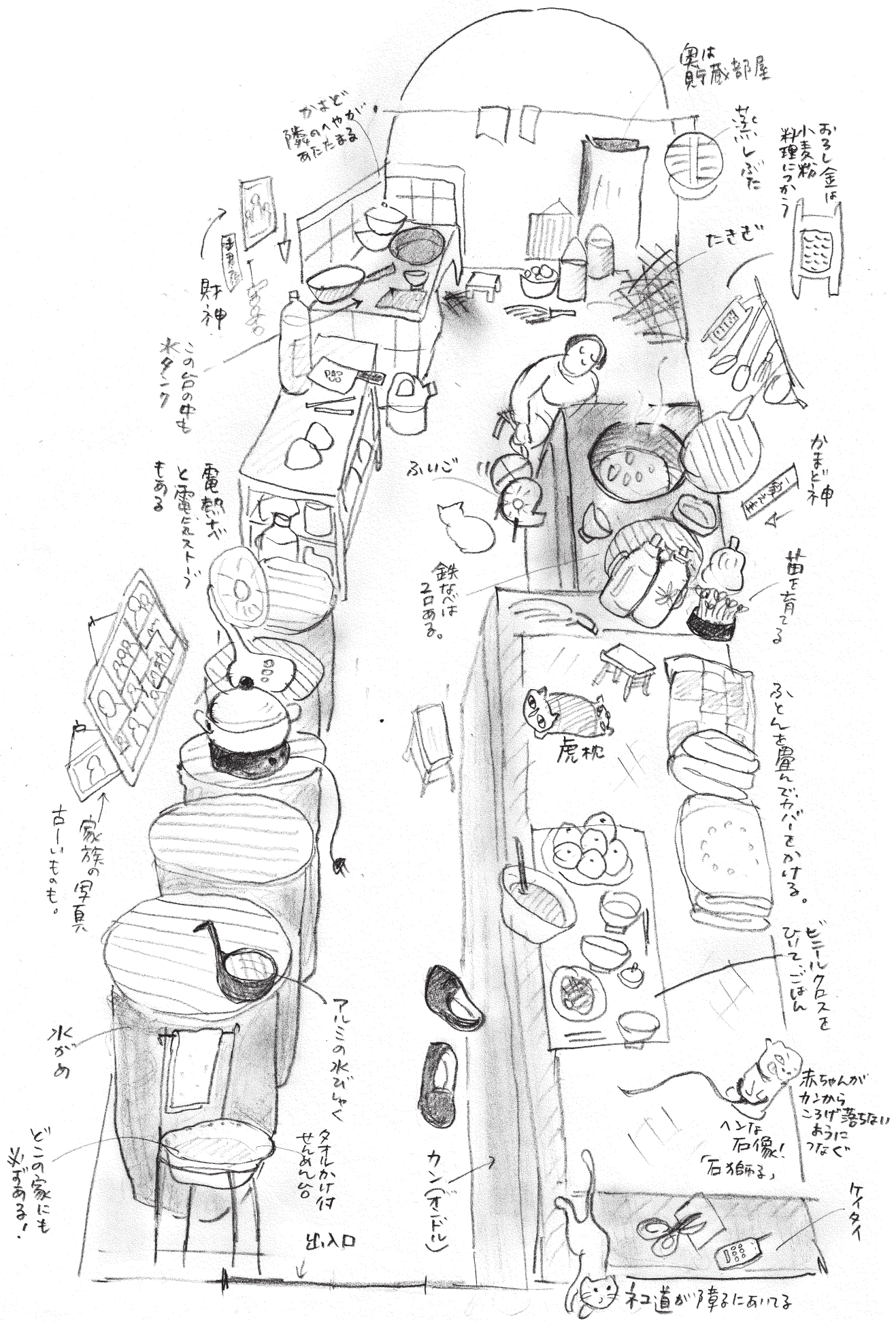
布靴

女性たちは家族ひとりひとりの足型に合わせて、一年間に何足も布靴を作る。靴底は古布を小麦粉糊で貼り合わせて厚くし、太い麻糸で滑り止めを兼ねた文様を刺す。子供靴も自作するが、展示品は路上市場で名人のおばあさんが売っていたものを購入。

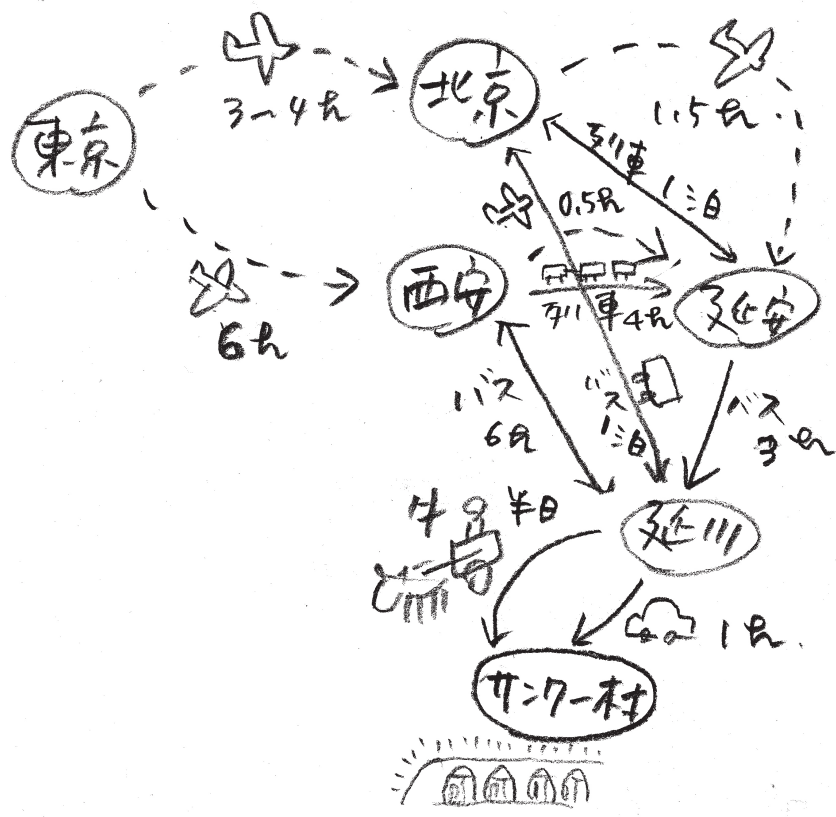
めんか 麵花

動物や人のかたどった小麦粉細工。生地をこね、鋏や櫛などを使ってかたちを作る。マントウと同様に蒸す。雄鶏のかたちはかまど神に供え、人のかたち（ザオシャン）は門神の代わりとなる。豆やナツメで目を入れる。清明節や端午の節句には、先祖や子供のために各種の動物を作る。





ヤオトン内部



黄土高原の風景 (撮影：馮奮)

天と地がどこまでも広がる黄色い大地。太古の昔から人びとは黄土の山肌に横穴を掘って造る伝統住居、ヤオトン(窯洞)に住んでいました。

本展の舞台、サンワー(桑窪)村のある陝西省延川県へは、北京や西安から、列車や飛行機で約2日。本展は、2008年より現地の人々と協働で行ってきたフィールドワークがもとになっています。

協力：馮山雲・馮奮一家、毛水源一家、延川県のみなさま

ヤオトンのファザード 中国陝西省延川県

中国黄土高原の横穴式の土の家、ヤオトン(窑洞)の玄関部分。サンワー村で実際に使用されていたもので、推定築 100 年程度。2 年前に日本で展示する為に現地から輸送し、展覧会終了後に日立市で 400 年続く神社一家に引き取られていました。本展では改めてそれをお借りし、設置しました。空間の条件に合わせ、通常の構造とは異なる展示となっています。

協力：馮奮さん・桑窪村のみなさま
福岡アジア美術館・世田谷文化財団 生活工房
臼井悦郎（日立市大久保鹿島神社 宮司）・臼井智子

「サンワー村へようこそ」（2009 年春節 映写時間 5 分）

2009 年、サンワー村での初めての年越し。マオさんに連れられて村の家々を訪れると、冒剪（^{マオ ジャオ}即興で意のままに紙を切る）名人のおばあさんや、お手製の窓花を窓に貼る女の子…と、歌をうたうように愛らしいかたちを生み出す女性たちと出会いました。

「冬のヤオトンの 1 日」（2013 年 映写時間 20 分）

年の瀬、子や孫が帰省して賑やかになった、マオ家のヤオトンの 1 日。年越し料理をつまみ、女性たちは布靴や、家の神々に供る麺花づくりに精を出します。

ヤオトンの特徴は〈冬暖夏涼〉。極寒の冬でも、かまどの煮炊きの熱でオンドル式の座敷兼寝床「カン」が温められ、快適な室温・湿度が保たれます。この地域の人びとの多くが、これからもこの土の家に住み続けたいと語ります。

『窓花 中国の切り紙 - 黄土高原・暮らしの造形』

サンワー村の暮らしや、作り手たちの物語、窓花の歴史、愛らしい窓花図絵の数々や作り方の解説もあり、付属の紙ですぐに作ってみることができます。